

図版 I 横穴群遠景(上)と17号横穴(下)

昭和三年八月一日から十日まで、中川は立教大学史学研究会の学生諸君とともに、伊豆考古学会の主催による静岡県田方郡大仁町宗光寺横穴群の発掘調査に参加した。この調査は、東京大学理学部人類学教室・日本大学考古学会との共同によっておこなわれたものである。ここでは、本学で担当した横穴群調査の事実と、それに関連する若干の問題について、岡本との討議の結果をのべて、本県ご出身の手塚隆義教授の還暦の賀に献げたいと思う。

この調査には、当時の史学研究会々長成瀬治助教授、卒業生小高清次・梅村繁・前田碧の各氏のほか、在学生山中隆実・井出莊四郎・植田勝三・山本勝彦・甘楽清・金子喬彦・田谷英浩・藤井博之・遠藤光一の諸君が炎天下をもちとわず参加された。これらの諸君の、発掘準備、調査、整理、略報発行にいたるまでの努力にたいし、ふかく敬意を表するとともに、調査中物心

伊豆宗光寺横穴群の調査

— 後期古墳群の研究(4) —

中川 成夫
岡本 勇

一 はじめに

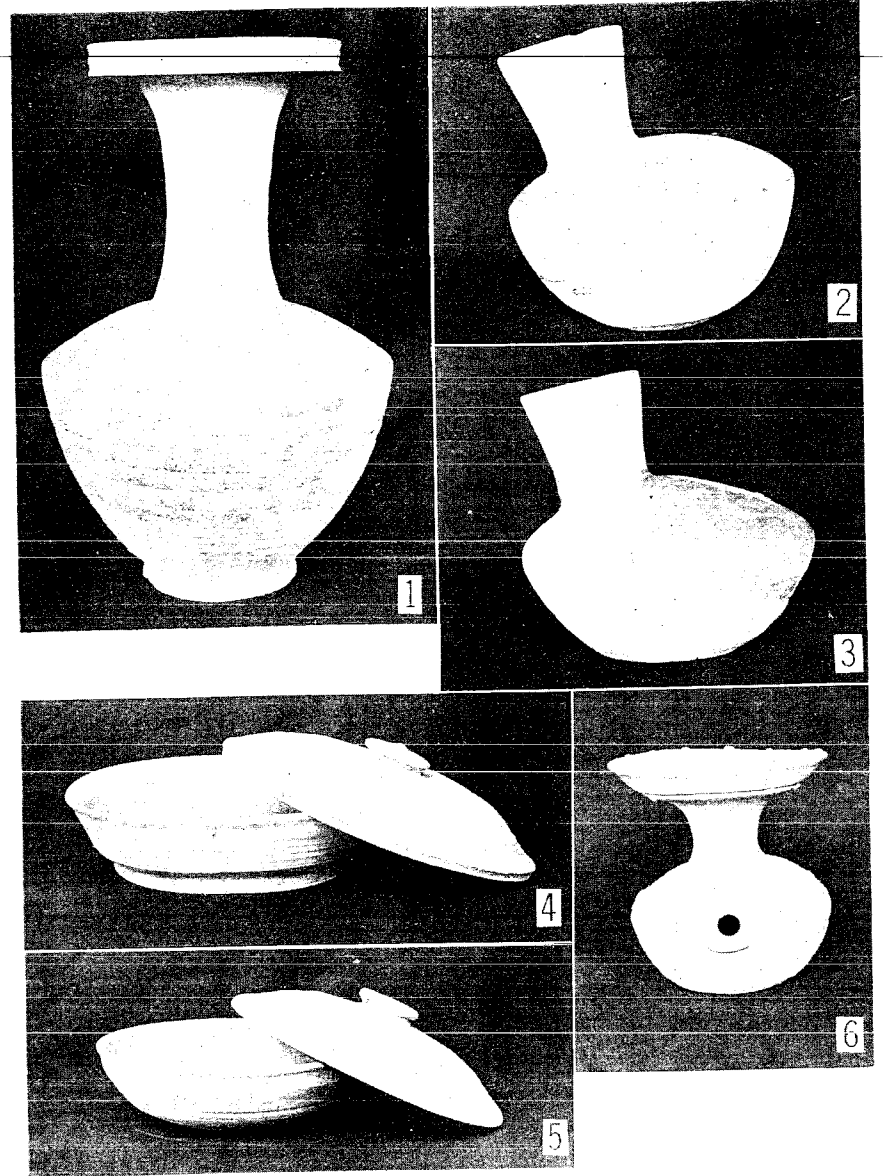
両面のご援助を頂いた、当時の東洋醸造株式会社の方々、日本大学の軽部慈恵教授以下、研究室のみなさん、ならびに大仁高校の生徒諸君にも衷心よりお礼を申し上げるしだいである。

なお、この調査については、昭和三二年度立教大学史学会大会で、山中隆実君による口頭報告があり、また史学研究会は、機関誌『瑞穂』の同年度号を「発掘特集号」として、その略報を掲載した。

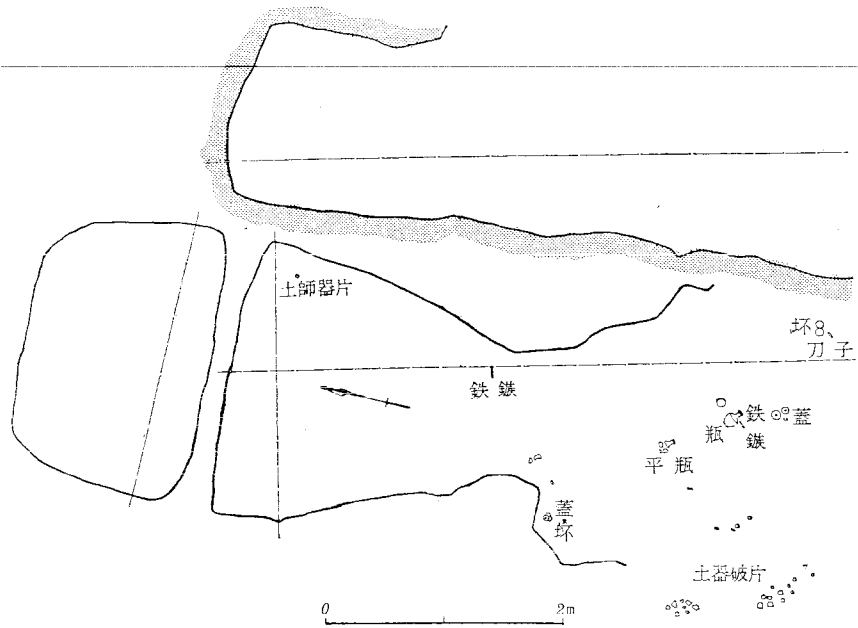
二 横穴群

この横穴群は、静岡県田方郡大仁町横山段六六一番地の山林中に群在する。宗光寺部落の北側の標高約一〇〇メートルの丘陵の中腹に、ほぼ二段にわたって、およそ五メートル前後の間隔をたもちながら、約三〇基が確認されている(第1図)。

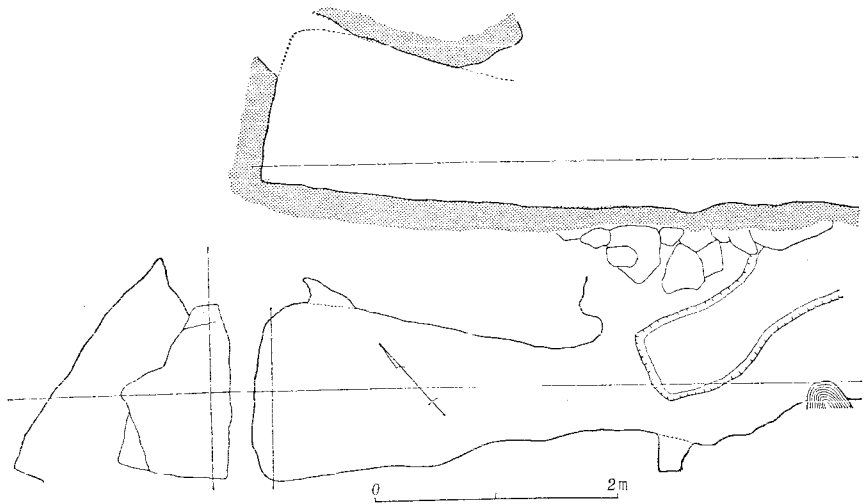
南方の宗光寺部落には、軽部教授により、白鳳末期に比定されている宗光寺廃寺址があり、また横穴群のある丘陵頂上には、伊豆最大の円墳といわれる宗光寺山古墳(須恵器・刀身・裝飾



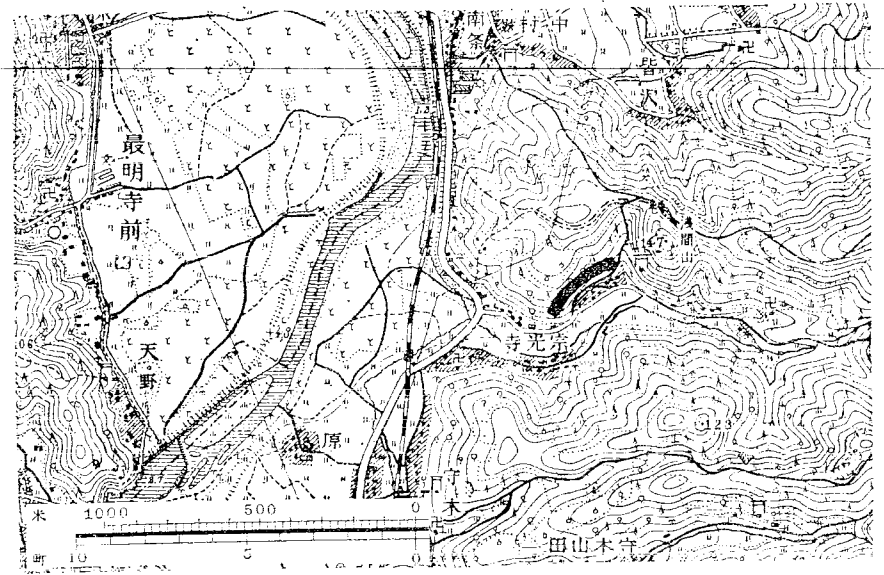
図版 II 須恵器 (1~3, 4, 5:13号横穴出土
2, 6:22号横穴出土)



第2図 13号横穴



第3図 16号横穴

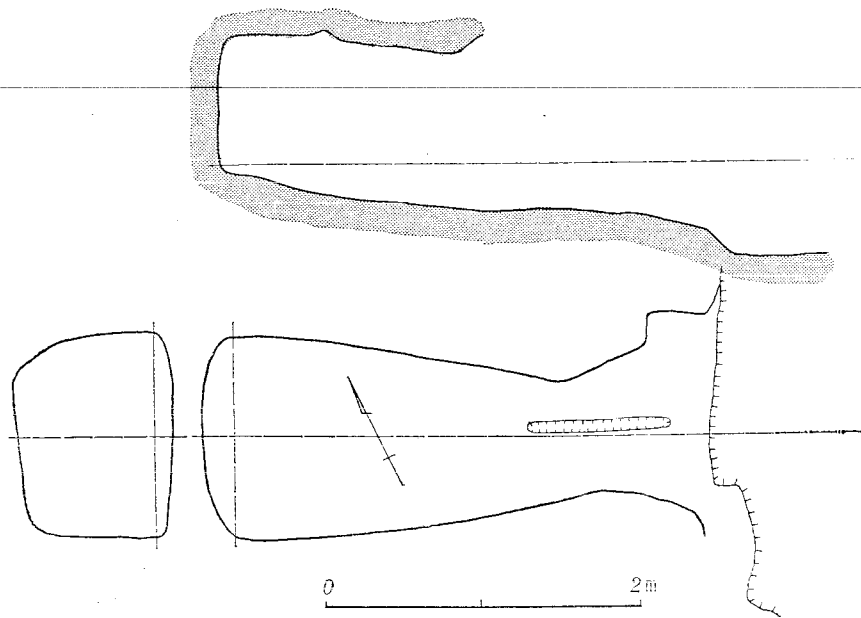


第1図 宗光寺横穴群の位置

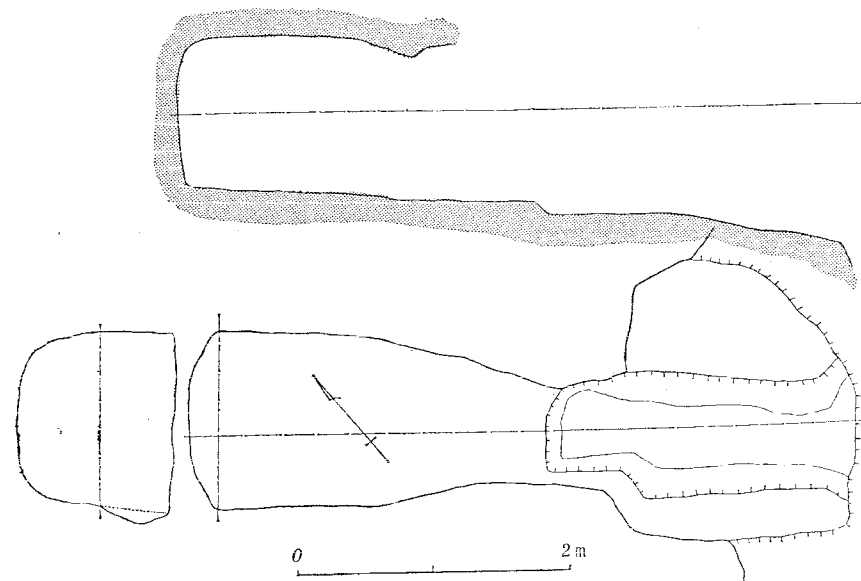
品等出土)がある。
 本横穴群については、すでに『増訂豆州志稿』に、「宗光寺岩屋二十余(穴ノ中間枯骨ノ残片ヲ見ル)。(同書二〇〇頁)」と記されており、古くからその存在が知られていた。また、明治三五年には、地元の松下虎郎氏が「田中村の横穴」と題して、東京人類学会雑誌(第一七卷一四号)に紹介をおこなっている。戦後、この横穴群のなかの一基からは、火葬骨壺が出土し、長田実・大川清氏らによって調査されたが、その資料は先年の三島南高校の火災のさいに焼失したという。
 われわれは、この横穴群のうち、すでに開口していた、一三・一六・一七の各号横穴の清掃と、あらたにボーリングスタティックでその存在を確認した二二・二三号のうち、二三号横穴の発掘をおこなった。

一三号横穴(第2図)

この横穴はすでに開口しており、入口に近い部分の天井などは、かなり崩落していた。玄室の平面形は、台形を呈し、長さ約二・四メートル、主軸はほぼ南北方向をとる。奥壁のかたちは、隅田の長方形といった感じである。入口の部分は細くすぼまっており、せまいところでは、せいぜい一メートルをはかるにすぎない。この付近には、たくさん岩塊が堆積していたが、このうちのいくつかは、疑いなく入口の閉塞に使われたものである。羨道とよべるものはなく、入口の外には、いわゆる前庭部がつくられている。これは岩盤を一定の範囲にあさく掘り凹めたもので、ややひろい面積を有している。



第4図 17号横穴



第5図 22号横穴

玄室内からは、鉄鏃・土師器破片各一点が発見されたはずがなかった。すでに内部は攪乱されたものと思われる。これに反し、前庭部からは、比較的まとまった状態で各種の遺物が出土した。すなわち、須恵器罎一、平瓶一、坏四、蓋四、須恵器・土師器破片若干、および鉄鏃・刀子各一がぞえられる。これらは、各所に群在する傾向をみせているが、とくに注意すべき出土状態は示していなかった。しかし、これらの多数の遺物の存在は、前庭部がたんなる墓前の区域ではなく、そうした遺物をなんらかの意味で必要とする施設であったことを教えている。

一六号横穴(第3図)

この横穴もまた、すでに開口していたが、崩壊はいつそういちじるしい。奥壁ならびに側壁の一部は、原形をとどめていない。玄室は細長く、長さ約三メートル、最大幅一・五メートルをはかる。プランは赤星直忠氏のいう「J型」に属し、断面は本来アーチ形を呈するものであったと思われる。主軸は北西-南東の方向をとる。前庭部はいくらか右にひらくようにつくられている。中央部には、羨道を思わせるようなあさい凹みがあり、これは主軸線より大きく大きくされている。前庭部の北端の一隅から須恵器罎一などが出土した。

一七号横穴(第4図・図版1ノ下)

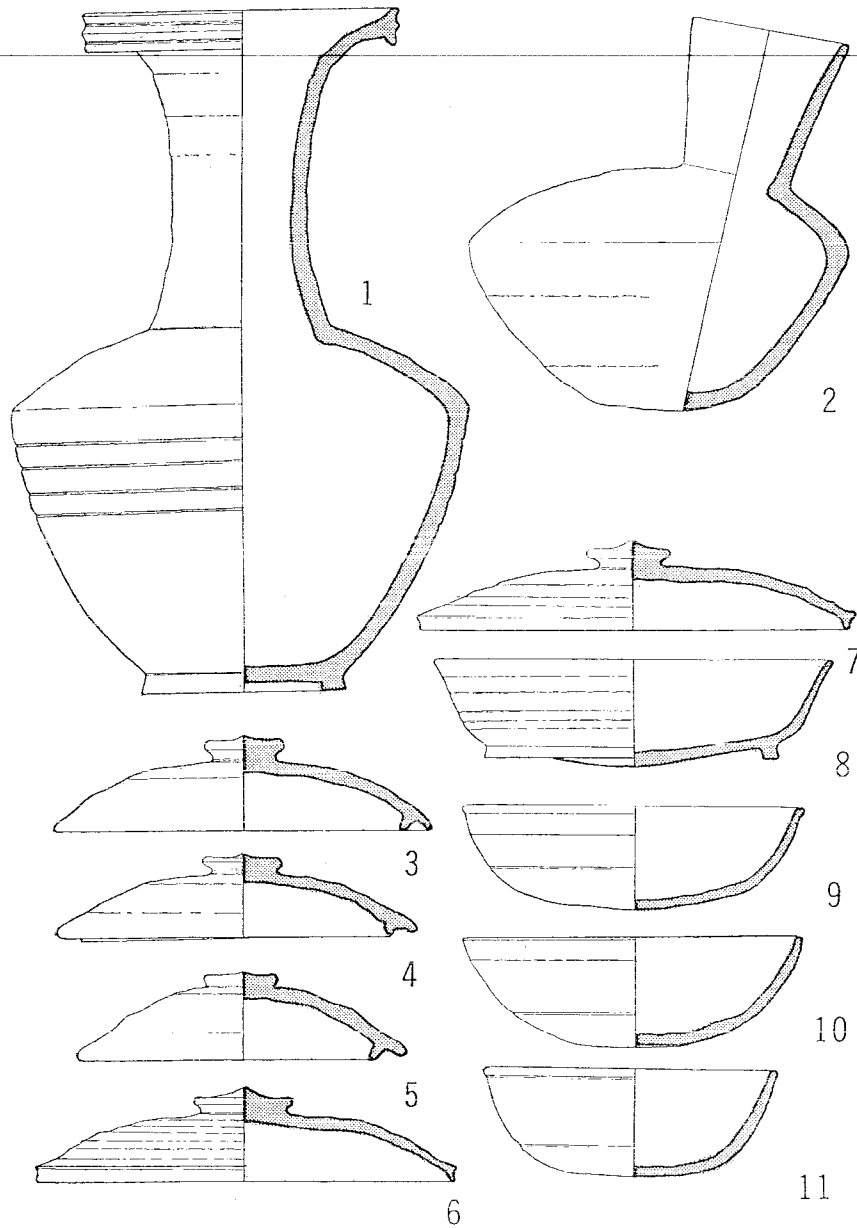
すでに開口していた。玄室のプランは、一六号の場合と同いであるが、奥壁と接する部分は角を有せず、いわば隅円となる。長さ二、三メートル、奥壁の幅一、三メートル、天井までの高さは一メートルにたっせず、きわめて低いことが注意される。

断面は赤星氏のいう「平型天井」にちかいかい。主軸はほぼ東西方向にあり、東に開口している。入口の部分の主軸線に接して、あさい溝がうがたれているが、これは排水・排湿のためのものである。入口の外は、一段低くなり前庭部と思える施設がつづくが、実態はあきらかでない。出土遺物は皆無であった。

二二号横穴(第5図)

ボーリングスティックによって、あらたにその存在を確認したものであるが、すでに内部には土や岩塊がかなり堆積していた。しかし玄室内には、遺物が原位置にまとまっていたので、攪乱をうけたとは思えない。プラン・断面ともに、一七号と大差ないが、玄室の中央部でやや内傾する点は、「I型」の特徴とみられなくもない。玄室の長さは約二、七メートル、奥壁の幅は一、三メートル、天井までの高さはおよそ一、二メートルをはかる。主軸の方向は、北西-南東を示す。入口付近には多数の岩塊が累積していたが、このうちの大部分は天井からの落盤である。一部には封鎖に使われたものがあつたかもしれないが、きめ手がなく緻密な区別は困難である。入口で岩盤は外側にひらき、前庭部をつくるが、中央に一段低くなった凹みがある。これはあるいは、羨道の役目をはたしたのかもしれない。玄室内からは、須恵器罎一、平瓶一、坏二、刀子一、鉄鏃一、鉄片三などが出土した。また、前庭部からは木炭の破片が検出された。

三 出土遺物



第6図 須恵器（13号横穴） 縮尺1/3

われわれが調査した横穴のうち、遺物の出土をみなかつたのは、一七号のみであった。一三号横穴の、とくに前庭部からは、かなり多くの遺物がまともに出土した、また、一二号の玄室における遺物については、前述したとおりである。一六号横穴からは、前庭部の一隅よりごく少量の土器（片）が見出されたにすぎなかった。

出土遺物の大部分は須恵器であり、ほかに少量の土師器片があるが、いずれも零細な破片のため、ほとんど問題にならない。土器以外の遺物としては、数点の鉄器（鉄鏃・刀子など）があげられるだけである。各遺物について、その概略を説明したい。

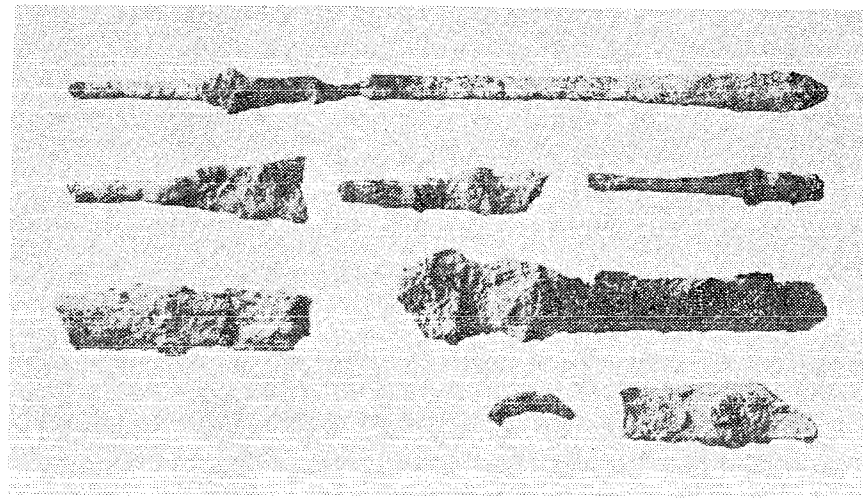
須恵器（第6・7図、図版Ⅱ）

形の上でみると、長頸瓶、平瓶、疎、環、蓋の区別がみとめられる。いずれもくすんだ灰色を呈し、色調は単純である。

長頸瓶（第6図1、図版Ⅱノ1）は、一三号横穴の前庭部のほぼ中央から出土したもので、高さ二七センチをはかる。口縁は折返し手法でつくられ、やや外反する。肩部にはゆるい稜がみとめられ、また底部はひくい勾台を有する。平瓶は二点あり、一三号の前庭部と二号の玄室から発見された（第6図2・図版Ⅱノ3、第7図4・図版Ⅱノ2）。形は両者ともほぼ同じである。頸はやや長く、胴部もまたいくらか高い。肩部に心もち稜がみとめられる。後者は破損がいちじるしい。疎（第7図1、図版Ⅱノ6）は、一二号横穴の玄室に副葬されていたもので、高さ一二センチ、比較的小形である。頸はあまりながくなく、口縁の幅と胴部最大幅はほぼ同じである。胴部はまるい。注意

すべきことに。ボタン状の小さなまるい貼付文が、口縁端、口縁下、および肩部の三方所にいくつかめぐっている。あきらかに装飾のためのものである。また、孔の周囲には故意に段をつくり、いくらか高くしている。

環は六個以上が発見された。一三号の前庭部から四個（第6図8・11、図版Ⅱノ4・5）、一二号の玄室から一個（第7図2・3）のほか、一六号の前庭部などから若干の破片がえられた。これらは、形の上で三つの種類に分けられる。一つは勾台を有するもの（第6図8、図版Ⅱノ4）で、一三号の前庭部から出土した。他の一つは、底部がまるみをもったもの（第6図9・11、第7図3、図版Ⅱノ5）で、一三・一二号の両横穴から四個以上が採集されている。数の上では主体を占めるものである。さらに他の一つは、口縁に蓋うけのためのつくりをもったもの（第7図2）で、一二号の玄室から出土した。これらの環には、蓋がともなっていたが、どれとどれがセットであったかは、あきらかではない。蓋は一三号の前庭部から五個（第6図3・7・図版Ⅱノ4・5）、おなじく一六号の前庭部から一個（第7図5）が出土した。いずれも宝珠状のつまみをもつものであるが、身と接する部分のつくりは二つの差がみとめられる。一つは、第6図3・5にあげたもので、いわば入の字形を呈する。これに反し、第6図6・7および第7図5は、T状のものであきらかに異なっている。また、前者のつまみは低く、厳密には宝珠状とはいえないかもしれない。この両者の差は、それと組合わさる環のちがいに関連があるのだろう。

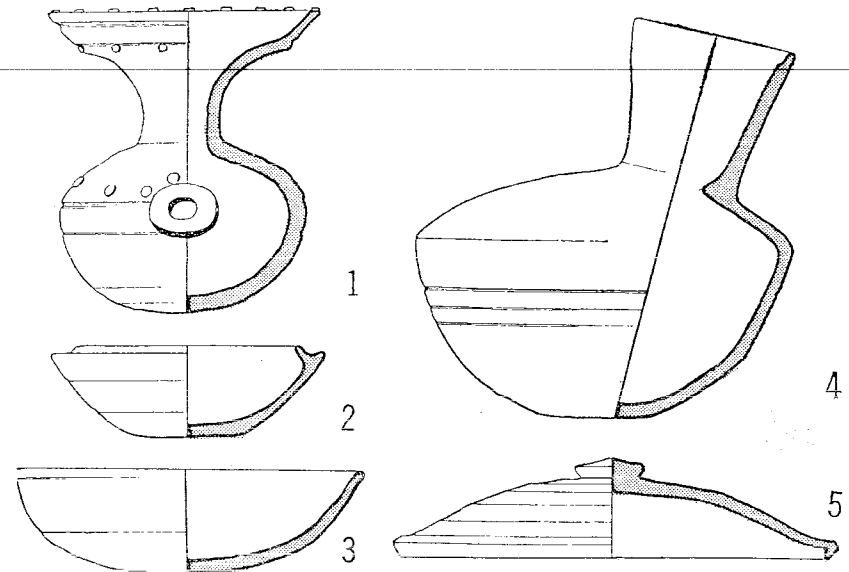


第8図 鉄製品 縮尺2/3

がある。出土土器の型式による場合と、横穴それ自身の形態による場合である。まず、出土土器についてみてみよう。

宗光寺横穴群から発見された土器のはほとんどすべては、須恵器であるが、一三号や一六号横穴の前庭部からは、少量の土師器が出土している。いずれも細片にすぎないが、本来の器形はおそらく坏であったと推定され、またその型式は、いわゆる「真間式」にもっとも近いように思える。

須恵器については、近年、横山浩一、楢崎彰一、森浩一などの諸氏による型式的・編年的研究がおこなわれ、その変遷の過程がいちじるしくあきらかとなってきた。この成果にたづねてみると、宗光寺横穴群の須恵器は、型式的にかならずしも単一ではない。これらのうちで、横瓶・瞭はより古いタイプを示し、長頸瓶などはやや新しい型に属する。多分、八世紀代の所産かもしれない。量的にもっとも多いのは坏であるが、一部はすでに勾台を有し、またいわゆる蓋受けの立上りは、いちじるしく退化している。さらに、これとセットになる蓋のつまみは、ポタン状のものではなく、宝珠形にちかい。坏・蓋にみられるこれらの傾向は、七世紀末ないし八世紀前半代の須恵器の特徴とみてよいだろう。出土土器の年代は、家族墓としての横穴の造営年代とつねに一致するとはかぎらない。とくに前庭部出土の土器は、葬送後にあるいは追葬のさいに、墓前祭的な意味で使用されたものが多かったろう。したがって、須恵器があらわす年代については、横穴が墓として使用されるには意識されていた期間、つまり若干の時間的な幅を考慮しなければならない



第7図 須恵器 (1~4: 22号横穴 5: 16号横穴) 縮尺1/3

土師器
一三号および一六号の前庭部から、およそ三〇個ほどの土師器の細片が出土した。いずれも小破片であるため本来の形は図示できないが、ほとんどすべては坏であり、少なくとも三個体以上があったものと推定される。

鉄器 (第8図)

鉄鏃が一三号より二本、二二号玄室内より二本出土した。このうち完全な形のもの、一三号の前庭部から出土したもの(第8図上段)で、尖根式に属し剣身形を呈する。また、二二号出土の一例は、雁股形にちかいものである(第8図二段目左)。刀子は、一三号(前庭部)と二二号(玄室)から発見されたが、いずれも破片にすぎない(第8図三段目)。ほかに、鉄片若干も見出されたが、本来の形状は不明である(第8図下段)。

四二横穴群をめぐる問題

宗光寺横穴群の年代

横穴が古墳時代後期に出現発達したものであることは、もはや周知の事実である。そして、大部分の横穴は、後期古墳の段階のうちでも、比較的新しい時期に位置づけられ、いわゆる群集墳として把握することができる。宗光寺横穴群も、その例にもれない。しかし、後期古墳の新しい段階とは、具体的にいつていつごろなのか。私たちは、まず宗光寺横穴群の年代について考えてみなければならない。

横穴の年代を知る手がかりとしては、少なくとも二つの方法

ぎのとおりである。⁽⁵⁾

福岡、大分、宮崎、熊本、山口、島根、鳥取、広島、岡山、京都、大阪、奈良、三重、福井、石川、富山、新潟、岐阜、静岡、神奈川、東京、埼玉、栃木、千葉、茨城、福島、宮城（このうち、広島・岡山は北方の県境近くに分布をみるにすぎない。また大阪や京都では、ごく一部の地域にのみかぎられている。さらに三重では北部に、新潟では西部にのみ、その存在が僅かに知られているだけであるといわれる。）

この全国的な分布のなかで、いくつかの空白があるのにきづく。九州の西北部・中国地方の瀬戸内海側と四国・兵庫・和歌山・長野群馬などの各県である。もちろん、今後発見の可能性があるにしても、空白を完全に埋めることは困難であろう。いったい、なぜこれらの地域に横穴の分布をみないのか。それらの各地域の地質条件について、いま十分な知識はもっていないが、おおまかにいって横穴の掘鑿に適した堆積岩が、まったくあるいはごく僅かしか——みとめられない地域であることはたしかである。横穴の分布は、地質条件によって左右されるのであろうか。たしかに、単純な事実の範囲では、そうみることもができるかもしれない。しかし、ことはそれほど単純ではない。一例をあげれば、広島県の県北に位置する比婆郡口和村常定の横穴などは、花崗岩の風化した岩盤に掘りこまれていたものである。これと同じ花崗岩の風化した岩盤は、ひろく瀬戸内海沿岸から兵庫にまでおよんでいるにもかかわらず、この地域には横穴は存在しない。つくろうと思えば、けっして不可能で

はなかったはずであるのに。

地質条件は、横穴の分布の上で「一つの要素」であったと理解すべきであろう。横穴の空白地域には、それにかわるなんらかの墳墓があったはずである。具体的にそれがなんであり、またそうした墳墓を必要とする歴史的な理由がなんであったのか。こうした問題を解決してこそ、横穴の分布は、その真相をはじめてとらえることができるに相違ない。

横穴の被葬者

いうまでもなく、横穴は古墳の一種である。古墳が「豪族」の墓であるといわれるからには、横穴もまた豪族の墓であったのだから。しかし、古墳の被葬者を豪族という画一的なものでとらえては、なんら問題は発展しない。後期古墳の群集墳のあらわれる段階には、すでに古代国家が確立し、階級支配のヒエラルヒーが秩序づけられていた。

横穴は、よくいわれるように横穴式石室の、いわば模倣として生れたものであり、したがってそれと年代的に併行するものも多かったわけである。横穴式石室をもつ古墳は、封土をもち、副葬品も比較的豊富である。また、このほかに横穴式石室こそないが、封土をもつ古墳も、同じ時期にかなりつくられたことが確実である。狩野川流域にも、横穴と併行していくつかの古墳が存在していたとみてよい。これらの古墳と、山腹に穴を掘っただけの、そして概して遺物の乏しい横穴とは、どうみても異質である。これは、おそらく被葬者の相対的な身分差の結果といったようなものではないであろう。

横穴群は、その分布の状態や立地の傾向から推して、ほぼ一村落——もちろんその規模と構造が問題ではあるが——に一群といった関係で存在したものである。そして、その村落内での家父長制家族を主たる被葬者としていたにちがいない。一方、点在する古墳の被葬者は、そうした土豪的なものではなく、律令国家の行政支配をおこなう官僚層を中心としたものではなかったろうか。同じ地域に、時期的に併行して存在した古墳と横穴の関係については、今後さらに実証的・理論的な研究をふかめていかなければならない。

最後に、赤星直忠博士の横穴研究の業績に敬意を表し、またその学恩に感謝したい。

- 註(一)横山浩一「須恵器」世界考古学大系三、稲崎彰一「後期古墳時代の諸段階」名古屋大学文学部一〇周年記念論集、森浩一「和泉河内窯の須恵器編年」世界陶磁全集、(2)赤星直忠「横穴の編年について」鎌倉市史考古編所収、同「神奈川県大磯町の横穴」大磯町文化財調査報告第一冊。

(3)赤星直忠「鎌倉市史、考古編」一五一頁。

(4)軽部慈恩他「伊豆和谷古墳群の発掘について」日本考古学論誌第二号。

(5)赤星直忠「横穴の伝播」新国学第一号。

(6)潮見浩「備後口和村常定の横穴発掘調査」古代吉備第三集。